

---

# 後継者

黒狐由意

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

後継者

### 【Nコード】

N5304D

### 【作者名】

黒狐由意

### 【あらすじ】

平安・師弟憎悪・寝取り属性。師匠を差し置いて弟子はそつと師匠の妻の下へ忍んで行く。師匠はそれを知っているのかいないのか笑いながら未来がどうなるのか語る。

ビシッ……。弾け飛ぶ血のしぶきが白い衣にふりかかり紅く染める。

クッククク……。低く笑う声は潜められている。

長く鋭くのびた爪はまるで刃物。その切っ先からは濁った同じ紅い色がしたたっている。

彼はそれを赤い舌でなめとる。

美しい秀麗な容貌をした男である。青ざめたような真つ白な肌が闇の中に見える。

けたもの。そう。私はけたもの。

彼は心でそういつて憎しみを込めたような笑みを強める。

暗い部屋で、薄ぼんやりと炎がゆらめく。闇の中に紫色の美しい女性。そして彼女ににじりよる青年。

「そうですか……。来てしまったのですね……」

「秋子さま……。お慕いしておりました」

青年はそういつて上衣を脱いだ。拒絶される事は決まてないと彼の動作は確信していた。

天女は誘いを拒むことはない……。彼の頭の中にはそんな言葉があったかも知れない。

青年は女を長い両腕で囲い込むようにして抱き締めた。ほのかに花の香りが漂う。彼女は花だ。

女の藤色の唇を奪って、青年は熱い吐息をつく。そう、これは人間ではない。花だ……。植物だ。

「どうなさいました？おじげづかれましたか」

美しい声で女は問う。その吐息は芳香。

「いいえ。……わたくしは確信したのです。あなたは、花なのです」

ね？」

青年は丁寧にそう言った。答えはなくともいい。答えはそれしかない。彼女の夫は人間が嫌いなのだ。そして……人間の女も嫌いだった。

青年は女を抱き締める手に力を込めた。奪ったらどうなるのだろう。

女の着物をゆるめ、脱がせもせず、ゆるんだ衣のすきまから、強引に女の肌に侵入する。

「お尋ねしてもよろしいですかしら……」

女は熱い営みの中、場違いにきちんとした声を出す。

「なんですか……」

青年は熱いものに思考を溶かされかけた声で尋ねる。

「あなたは……あの方に……思い知らせてやろうというのですか」  
それで私を抱いたのですか？と問いは続いているのだろう。

「いいえ……」

青年はそう言いつつ、きつと女の言う通りなのだろうと心の中では素直に認めた。あの方のことは慕っていたが、どこかで思い知らせてやろうとか、出し抜いてやろうとか思っていたような気がする。理屈でなく、あの方の大事ななにかを壊してしまいたかったのだろうか。

あの方がその腕に、私の血の通った子供を抱けばいいのだ。愚かな超越者。なにも知らずに、その子供を後継者とすればいい……。そしてえんえんと彼の姓は続き、本当は私の血が続いてゆく……。そんな裏切りに彼は陶醉していた。

鋭い角のように長い爪が生き物の生の脈を切り裂く。血しぶきが飛ぶ。彼は微笑む。彼は人間が嫌いだった。女も。だから彼は自分の好きなものだけ付き合っていた。良心は彼のことをしきりに非難した。お前は狂ってる。おかしい。お前は人間なのに人間の中に

交われない。人間のふりをする事すら出来ないのか。なのにどうして人の世に生きる。厭世しているのにどうしておめおめと生き続けている？何かになれ。お前にふさわしいものに。それがなんだか自分で知っているだろうに。

俺は白い蛇の妖かしが好きだ。そいつは優雅な首をして、いつも蛇を首に巻き付けた美しい若い男の姿をしている。そいつを俺はいつもこき使っていた。そういうのをやがて人に噂され、俺は干支の動物を操っているということにされた。俺にだって好みはある。女……特に人間の女は未成熟で嫌いだ。男はまだいい。骨格が育っている。しかし、人間／男は性／女にこだわりすぎるからその習慣にはついてゆけないのだ。恋の歌……たくさんあるがちっとも面白くない……俺は蛇を愛でている方がずっといい。蛇の男は美しい。そして俺の好むことも共にわかまえる。人間などよりずっと俺のことを理解してくれる……。

「死ね……」

彼はもてあそんでいた生き物の息の根を断つ。彼は含み笑いをする。

「そんなに女を奪うことが意味のあることなのかねえ……。所詮人間など、……見所のある奴だと思っていたお前ですら、只の繁殖期の獣であつたとはな……」

アハハハハ……彼は大声で笑う。彼の後方の闇にぼんやりと美しい青年の顔がにじんでいる。それは伏し目がちでどこことなく悲しげで弱々しい表情をしていた。その物怪は白蛇の腕をのばし、彼を後方から抱き締めた。彼はぞくぞくと震える。

「白蛇よ……私はあいつの挑戦を受けてたつぞ。俺はあいつが好きだ。だからとても恐ろしい目に合わせてやる……」

彼の瞳が一瞬稲光の色に変化した。

「どうなさるおつもりですか」

白蛇が静かな声で問う。

「どう？子供を育てる。……末はこの家を背負ってたつことになる

だろう」

彼はまた大声で笑った。

「歴史など嘘まやかしばかりよ。真実は人々がめちゃくちやにするのだ」

「お早うございます」

「お早う。なんだ。遠出の支度をして」

翌日、彼は弟子の服装を見やっつてそう言った。

「ええ。故郷へ帰ることにしました」

「また、急に、どうして」

青年はどこか陰りのある微笑をして師匠を見返した。

「ええ、また……初心に帰って故郷で人の役に立てればと……」

「そうか……元気でな」

「ありがとうございます」

「そうだ」

師匠である男は部屋に入っていつて何か探し、青年に差し出した。

「これは……」

入門のとき持参した氏名の入った札だった。

「私はお前には何もせぬからな。しかし念の為だ」

彼は冗談っぽくそう言っつて笑った。

「では……長いことお世話になりました」

青年は男に見送られて去った。

男と秋子の息子は期待通り男の後をついだが、容貌は男には似ていなかったらしい。だが、その子孫は天災を避ける身体を持っていたりと何かに守護されているかのようであつたようである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5304d/>

---

後継者

2010年10月8日15時51分発行